

函館におけるツーリズムと大火との関係についての 予備的考察

——ダークにならないツーリズム——

Preliminary Considerations About the Relationship Between Tourism and the Big Fire in Hakodate: Tourism Without Darkness

麻生 将*

要 旨

近代以降の函館市でたびたび発生した大火は多くの犠牲者を出した。1934（昭和9）年の大火では総人口の1パーセント以上の人々が亡くなった。本稿では、こうした事実が現在の函館市のツーリズムにどのように影響しているかについて分析を試みた。具体的には、(1) 一般的なツーリズムと (2) 大火の慰霊祭への参加の2種類について検討を試みた。このうち (1) について述べると、現在の函館市の観光パンフレットや観光案内のいくつかには大火への言及がみられるが、大火による大勢の犠牲者を思い起させるような要素はほぼ皆無である。また、(2) については、データが少ないので十分な分析ができていないのだが、大火の慰霊祭には遺族を中心に毎年複数の人々が参加している。彼らにとって、慰霊祭に参加することは犠牲者の鎮魂の旅と同じ意味であり、それは死者を思い起こさせるダークツーリズムなのである。

現在の函館市において大火という歴史的事実があるにも関わらず、一般的なツーリズムからはダークな要素が排除されている。他方、大火の慰霊祭は

* 立命館大学文学部特任助教

ダークツーリズムそのものである。これら二つのツーリズムは互いにあまり関わっていないように見えるが、今後思いがけないところで関係を持つようになるかもしれない。

Abstract

There have been many victims of several big fires in modern Hakodate. More than 1% of the total population died in a big fire in 1934. This paper examines the analysis about how some big fires in modern times have effected contemporary tourism in Hakodate. Specifically, there are two views to analyze about (1) general tourism, and (2) participation in the memorial service for the big fire. The results are as follows:

(1) : Though some tourist brochures and travel guidebooks of contemporary Hakodate refer to the modern big fires, there are few elements which let tourists remember victims of the big fires.

(2) : Though it is impossible to analyze well because there is not enough data, bereaved family and other people participate in a memorial service every year. For the participants, this memorial service provides repose for the souls of those lost in the fires. This dark tourism helps the participants remember the victims of the big fires.

Though there is the historic fact of the big fires, the element of darkness is removed from general tourism in Hakodate today. On the other hand, the memorial service for the big fire is dark tourism. These two types of tourism do not seem to have any relationship to each other, but they could have some kind of unforeseen relationship in the future.

キーワード：函館市、ツーリズム、大火、ダークツーリズム、慰霊祭

Key words : Hakodate city , tourism , the Big Fire , dark tourism , Memorial

service

1. はじめに

近年、ダークツーリズムに関する現象に注目が集まっており、ツーリズムに関連する研究事例も蓄積されつつある。ダークツーリズムとは人（々）の死と強く関わるとともに、死というものを訪問者に想起させる観光およびその諸現象を指す用語である。当然ながら、ダークツーリズムが成立するためには（1）人（々）の死という事実が存在し、（2）なおかつその死を訪問者がリアリティを持って想起する、という二つの要素が最低でも必要になってくる。言い換えれば、これら二つのどちらかが欠けた場合、ダークツーリズムが成立しないか、もしくはダークな要素が無い、通常のツーリズムになるのである。Stone（2006）や雨森（2013）によれば、特に（2）に関して、人（々）の死を訪問者が想起しなくなる大きな要因の一つは時間であるという。すなわち、数十年程度であれば訪問者本人から数えて数世代以内の死であるためにリアリティを強く持って想起されるのだが、数百年を経た場合には死という事実は認識できても、リアリティを持って死を想起することが困難であるため、ダークな要素がそこから欠落するのだという。

たしかに、死に関する事実が時間とともにリアリティを失うというのは一面では真実であるが、他方において百年以内であっても死のリアリティを想起させない場合もあるし、数百年経った場合であっても、肉親に対するようなリアリティではないにせよ、人（々）の死の事実を心理的または霊的なリアリティを持って感じる場合もある。そのため、ツーリズムにおけるダークな要素を規定するものとして、時間以外にどのようなものが考えられるであろうか。もしくは、人（々）の死がリアリティを持って感じられるとしても、それが哀悼、供養、悲劇、といったキーワードを伴わない場合も考えられる。人（々）の死という事実のみならず、そこに思いを巡らす側の感情、心情、感性もまたダークツーリズムを考える上で重要ではないだろうか。このよう

な問題意識はダークツーリズムという用語の定義や概念がまだ定まっておらず研究途上にある、ということ物語っているのかもしれない¹⁾。

本稿ではこうした問題意識を踏まえ、人(々)の死という事実がツーリズムの中でどのような影響を与えるのか、その中でダークな要素はどのように現れたり除外されたりするのか、といった点について予備的な考察を行う。今回は現在の北海道函館市を対象に、一般的なツーリズムと函館大火の慰霊祭の2種類についての検討を試みていきたい。第2章では函館市の概要と観光開発の経緯、そして函館市にいて頻発した大火について概観し、第3章ではこれらがそれぞれ現在の函館市の一般的なツーリズムとどのように関係しているかについて考察を行う。そして第4章では函館大火の慰霊祭をめぐる一連の事象を通して函館市におけるダークツーリズムについて考察し、最後の第5章で課題と今後の展望を述べていきたい。

なお、調査は2013年3月3日から3月6日と同年8月18日から8月21日の2度にわたって函館市を訪問して行った。調査方法は主に聞き取りと史資料の閲覧である。具体的には函館市役所保健福祉部と函館大火慰霊堂(後述)の事務所、社団法人函館共愛会、函館仏教会、心和会、カトリック元町教会、トラピスト修道院の関係者への聞き取りである。また、函館市観光コンベンション部とJR函館駅での観光パンフレットの入手のほか、函館市立図書館で近世の函館の絵図や函館大火時の調査報告書などの閲覧を行った。

2. 函館市の地域概観と函館大火

2-1. 函館市の略史

函館市は北海道南西部の渡島半島の南端に位置する都市で(図1)、人口は約27万人である。函館市は津軽海峡に面しており、かつては本州と北海道を結ぶ航路の発着港であった。また、後述するようにロシアや中国との貿易港として発展したほか、北洋漁業とそれに関連する諸産業の拠点でもあった。

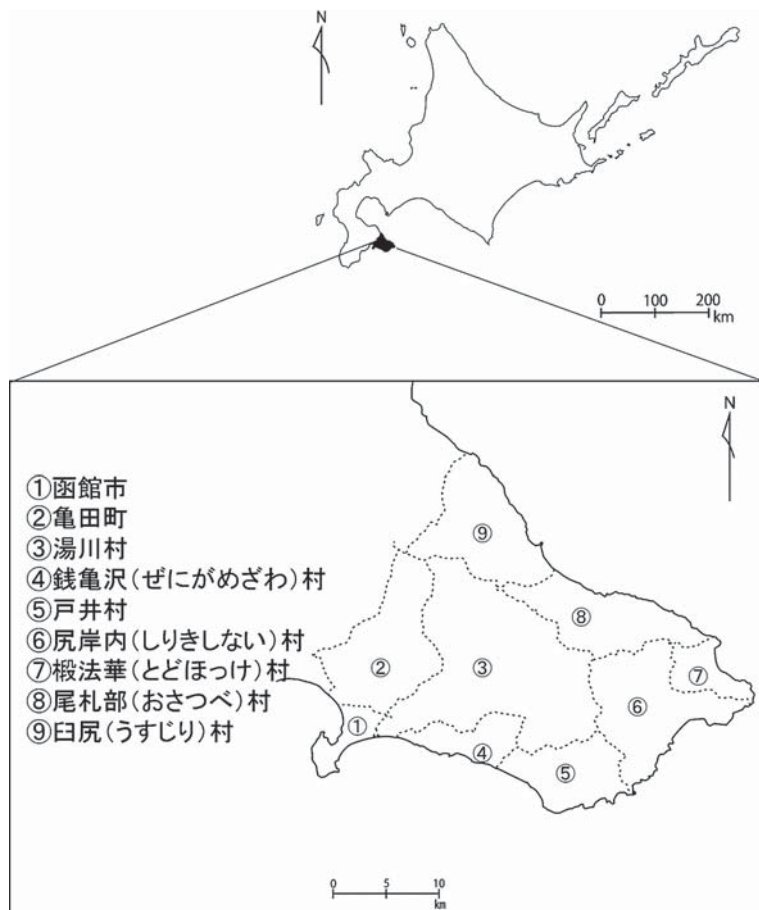


図1 対象地域概観

(昭和9年ごろの行政区である図中の①～⑨が現在の函館市域である。)

出典:20万分の1地勢図「函館」(大正14年)、「尻屋崎」(大正10年)をもとに筆者作成

函館は江戸時代から松前藩や幕府による蝦夷地支配の拠点であった。幕末の日米和親条約によって伊豆の下田とともに開港してからは多くの貿易商人や外交官、キリスト教の宣教師が来訪し、函館を拠点に活動した。明治最初期には榎本武揚が函館に築かれていた五稜郭を占拠して新政権を樹立し

たが、まもなく明治政府軍との間で戦闘が行われ、戊辰戦争の最後の戦地となった。こうした出来事を経て、近代函館の歴史が幕を開けたのである。

明治時代の前期はロシアをはじめとする欧米諸国や清国との貿易港として栄えた。最初は函館の市街地は函館山の麓に形成されていた(図2)が、現在も観光名所となっている近代建築の多くが函館山の麓に分布しているのはこのためである。また、函館は本州から北海道への人口移動の拠点でもあり、明治期を通じて人口は一貫して増加し続けた(表1)。それにともなう市街地も函館山の麓から砂州を経て内陸部の亀田川付近にまで次第に広がっていった。なお、函館山には明治以降陸軍の要塞が設置されており、一般の立ち入りや写真撮影が厳しく制限されたため、民間人と軍とのトラブルがたびたび発生していた²⁾。国有地であった函館山が函館市に編入されたの

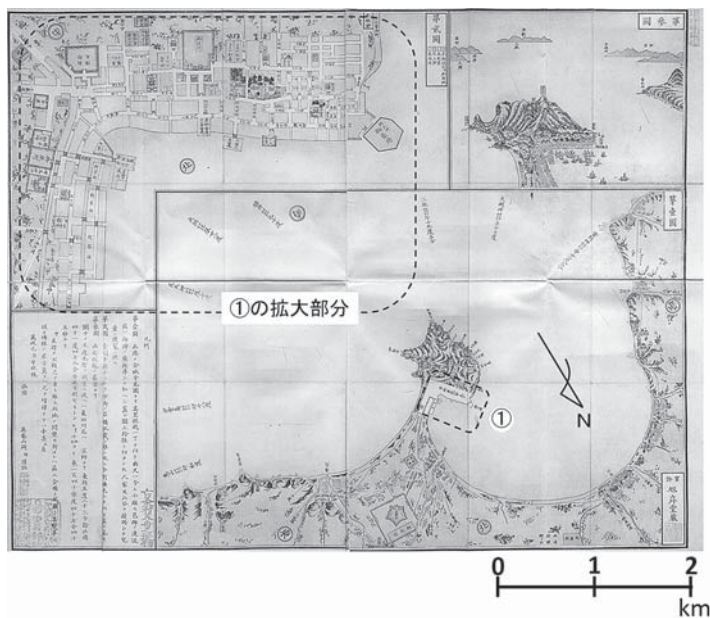


図2 「官許箱館全図」(万延元年(1860)年発行)

出典：『函館市史 通説編 第2巻 付録』をもとに筆者作成

表 1 近代の函館の人口推移

年代	人口(人)
嘉永六(1853)年	9,419
明治二(1869)年	25,000
明治三九(1906)年	90,885
大正三(1914)年	100,000
大正一二(1923)年	150,000
昭和五(1930)年	197,252
昭和一〇(1935)年	207,480

出典：『函館市史 通説編 第3巻』をもとに筆者作成

は第二次世界大戦が終結して数年後のことである。

やがて明治後期から大正時代にかけて、函館は北洋漁業の拠点としての機能を有するようになり、同時に鮭の缶詰工場や造船、鉄工、製材といった漁業関連の商工業施設が立地したほか、北洋漁業関連産業の企業が函館にオフィスを構えた(図3)。また、それにともなって東北地方を中心とする全国



図3 大正期の缶詰工場とオフィスの分布

出典：『函館市史 通説編 第3巻』所収の図に一部加筆

各地から漁業関連の出稼ぎ労働者が函館に集まり、表1のように大正時代を通じて人口は五割程度増加した。人々の移動が活発になった函館市は商工業が発展し、大正時代には百貨店や映画館、カフェーなどの商業施設が立地するモダンな都市であり（図4）、1935（昭和10）年までは札幌市を抑えて北海道最大の人口を有していた。

その後、昭和前期の満州事変を契機として日本とソ連との関係が悪化する



図4 大正期のモダンな函館

（上：恵比須町・銀座通り、下：カフェー・ムサシノのマッチラベル）

出典：『函館市史 通説編 第3巻』より抜粋

と、北洋漁業もその影響を受けるようになり、太平洋戦争による船舶および人員の不足によって北洋漁業は衰退していった。そして、太平洋戦争の終結後にはマッカーサーラインの設定による漁業制限が行われ、北洋漁業は1950年代まで再開することができなかった。同時に太平洋戦争末期の千島列島および南樺太からの約6万人の引揚者が函館に滞在したことによる失業者の増加と戦後の食糧不足を解消すべく、沿岸でのイカ釣り漁業が行われた。一時的に経済発展を遂げたものの、乱獲によってまもなくイカの漁獲量は減少した。

やがて1952（昭和27）年のマッカーサーライン撤廃によって北洋漁業は再開され、高度経済成長期に差し掛かっていたこともあり、1956（昭和31）年頃にかけて発展した。だが、ソ連との交渉や200カイリ経済水域の設定などの結果、北洋漁業はその後数年のうちに衰退することになった。基幹産業であった北洋漁業と漁業関連産業に代わる新たな産業として函館市が観光開発に本格的に取り組み始めたのもちょうどこの頃である。

2-2. 函館市の観光開発

函館市での本格的な観光化は第二次世界大戦後に始まった。現在に至るまでの函館市の観光開発を概観すると、表2から明らかなように、観光開発の分岐点となる三つの出来事が見られた。

一つ目は1950（昭和25）年ごろに始まった函館山の観光開発である。当初は函館市と市の商工団体が函館山の払い下げを政府に要請し、認可された後に軍用道路をドライブウエーに改良したり砲台跡に展望台を設置したりするなどの開発が行われた。市街地と同様に観光開発もまた、函館山から出発したといえる。その一方で函館山の開発に反対する住民運動が1960年代に起こった。

二つ目は1954（昭和29）年の7月から8月にかけて行われた北洋漁業再開記念北海道大博覧会（北洋博）である。この博覧会の総予算は3億円（当

表2 戦後の観光開発の主な出来事

年代	出来事
1950	軍用道路を改良してドライブウエーを整備
1952	観光宣伝用のポスターを作成、全国に配布
1953	山頂の砲台跡に展望台が完成
	登山バスを運行(日曜日と祭日)
1954	北洋漁業再開記念北海道大博覧会(北洋博)開催
1957	函館山が『週刊読売』の"新日本百景"の第一位になる
1958	函館観光事業株式会社設立
	ロープウエー建設、完成
1988	青函トンネル開通記念博覧会開催

出典：『函館市史 通説編 第3巻』をもとに筆者作成

時)で、入場者は80万人ほどであった。また、この博覧会にともなって市内のデパートの増築や商店街のアーケード整備、函館公園内の動物園の建設や函館山登山道の整備などの開発が進められた。

そして三つ目は1988(昭和63)年の青函トンネル開通記念博覧会である。これはその6年前の1982(昭和57)年に作成された『函館市観光基本計画』の中の「恵まれた自然と豊かな歴史的文化遺産の活用」を具体的に実施するというコンセプトで函館山展望台とロープウエーの一新、古い赤レンガ倉庫群の活用によるウォーターフロント開発、ホテル建設と投資の増加、などの変化がみられた。

なお、現在の函館市を訪れる観光客は表3にあるように年間500万人前後である。世界的な不況や東日本大震災の影響で400万人台前半まで落ち込んだ年もあったが、近年は400万人台後半に回復している。おそらく雪の影響からか、冬季よりも夏季の方が観光客数が多いことが分かる。

また、現在の函館市の主な観光エリアは図5のように4ヶ所である。このうち、1939(昭和14)年に函館市と合併した旧湯川町³⁾の範囲に該当する

表 3 近年の函館市の観光客数の変化

年度	観光客数(人)					
	4月～9月	変化率(%)	10月～3月	変化率(%)	合計	変化率(%)
2003	3,610,000		1,638,000		5,248,000	
2004	3,501,000	-3.02	1,566,000	-4.40	5,067,000	-3.45
2005	3,259,000	-6.91	1,584,000	1.15	4,843,000	-4.42
2006	3,305,000	1.41	1,560,000	-1.52	4,865,000	0.45
2007	3,220,000	-2.57	1,598,000	2.44	4,818,000	-0.97
2008	3,109,000	-3.45	1,453,000	-9.07	4,562,000	-5.31
2009	2,876,000	-7.49	1,456,000	0.21	4,332,000	-5.04
2010	3,117,000	8.38	1,469,000	0.89	4,586,000	5.86
2011	2,667,000	-14.44	1,441,000	-1.91	4,108,000	-10.42
2012	3,035,000	13.80	1,466,000	1.73	4,501,000	9.57
2013	3,252,200	7.16	1,566,900	6.88	4,819,100	7.07

出典：函館市ホームページの公開データをもとに筆者作成

<http://www.city.hakodate.hokkaido.jp/docs/2014021800059/>(最終閲覧日：2015年1月18日)



図 5 現在の函館の主な観光エリア

出典：https://www.google.co.jp/maps/@41.7829775,140.7620359,14z (2015年1月16日閲覧)をもとに筆者作成

湯の川以外の観光エリアは函館市の中でも比較的初期に開発された範囲に位置している。特に元町の旧イギリス領事館跡や旧函館公会堂、ハリストス教会堂やカトリック元町教会堂など近代前期に建てられた建物が観光スポットとなっている。また、先述のウォーターフロントには明治期から大正期の赤レンガ倉庫群が観光グッズの販売店やカジュアルな洋服店として利用されているほか、「函館朝市」では観光客向けに新鮮な魚介類の販売が行われている。

こうした現在の函館市の中心的な観光エリアのうち、元町とウォーターフロント付近は先述したように函館の歴史の中でも比較的古い市街地であり、明治以降もたびたび発生した大火によって多くの被害を受けてきた。そして、近代函館の都市形成にも大火が少なからぬ影響を与えていったのであるが、次節では函館において大火が頻発した背景とともに、近代函館の最大の大火について述べる。

2-3. 函館大火の概要

函館市はその自然環境からたびたび大火に見舞われてきた。函館山からの風の吹き降ろしや津軽海峡を通る強い海風にくわえて、市街地全体の水量の少なさによって、近世から近代にかけての函館の街はたびたび焼土と化してきた。前述のとおり、江戸時代に函館の最初の市街地が函館山の麓に形成されたのだが、この付近には河川がほとんど流れておらず、人々はもっぱら井戸水を利用していた。そのため、ひとたび火災が発生しても消火できるだけの水が常に不足していた。また、函館の住民の多くが水売りから生活用水を購入していたこともあり、火災時の消火用水の確保が困難であったことも大火の要因の一つとなった⁴⁾。

明治以降も市街地の多くが被害に遭う大火が10回ほど発生しているが、そのうち1907(明治40)年、1921(大正10)年、そして1934(昭和9)年の大火が近代以降特に激しいものであった。明治40年の大火を契機に函館山

付近の道路拡幅が行われ、防火帯としての役割を期待された⁵⁾。また、大正10年の大火の後にはコンクリートやレンガなどの耐火性の建築資材が普及するとともに、水道設備も整備されていった。しかし、昭和9年の大火では火元が市街地の縁辺部だったことから水道管の水圧が弱かったことと、乾燥した強風が吹いていたこと、そして火元周辺に木造家屋が密集していたことなどの条件が重なった結果、当時の市街地の4割あまりを焼失させ（図6）、2166名もの人々が一夜にして犠牲になる函館の歴史上最大の大火が発生したのである。

この大火の後、警察や軍隊のほか、函館市の聖公会、カトリック、函館市の仏教界などの宗教団体が復興支援や犠牲者の慰霊を行った。また、復興のために全国各地から寄せられた義捐金をもとに函館市の外郭団体として同年11月に「共愛会」が発足した⁶⁾。これは関東大震災後の同潤会と同じような性格の組織で、被災者への復興支援として住宅の建設を行っていた。また、複数の保育施設の運営も行っていたが、これは復興のために働かねばならなかった母親のために子どもの保育が必要であったことに由来するという⁷⁾。共愛会は第二次大戦を経て「函館共愛会」と名称を変更して、現在に至るまで函館市内に複数の保育園、病院、特別養護老人ホームなどを運営してきている。

そして、本格的な犠牲者の慰霊の施設として1938（昭和13）年に共愛会によって慰霊堂が建設された。その場所は大火の際に最も多くの犠牲者がでた所で⁸⁾、現在は大森公演として整備され、その敷地内に慰霊堂が存在している。

3. 現在の函館市のツーリズムに見られるダークの位置づけ

本章では現在の函館市の一般的なツーリズムにおいて、人（々）の死の事実および記憶すなわちダークな要素がどの程度見られるか、換言すれば一般的なツーリズムを人（々）の死に関する歴史的な事実および記憶がどのような形で構成しているのかを検証する。その際、筆者が2013年の3月と8月

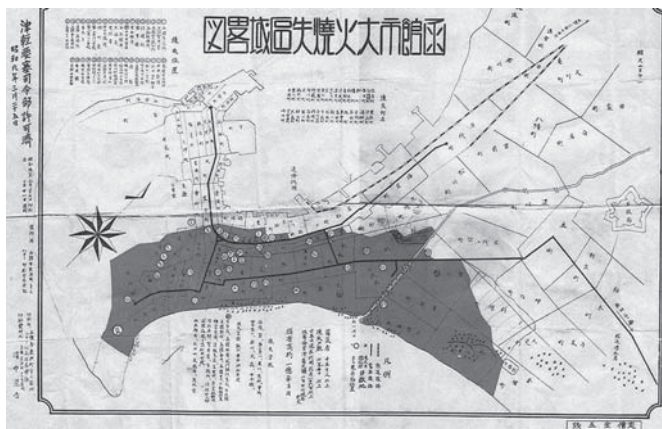


図6 函館大火(1934年)の被災状況

出典：上：大火直後の市街地（菅初次編・出版『函館大火災復興写真帳』、1934、より抜粋）
下：函館大火の被災範囲（函館共愛会提供）

の調査時に収集・撮影した函館市で配布されている観光パンフレット、駅や空港に設置されている観光案内の看板、観光地に設置されているモニュメントなどを用いる。

なお、本稿では先述したように、近代以降たびたび発生した大火の歴史的事実や記憶とツーリズムとの関わりを通して、函館市におけるダークツーリ

ズム的な要素について検討していくが、ダークツーリズムの代表例である戦跡として五稜郭跡を第1節で取り上げる。その際、2013年8月に五稜郭タワーで行った観察結果をもとに考察を行っていく。

3-1. 五稜郭における戦跡観光とダークな要素

図7は五稜郭跡に隣接する五稜郭タワーの展望台に設置された戊辰戦争の歴史に関するパネルである。パネルの中では戦闘をはじめとする当時の状況がミニチュア模型や4コマ漫画を用いて説明されている。こうしたパネルの前に立ち止まって説明文を読む観光客も少なからず見られたが、大半の観光客は展望台から一望できる函館市街地や五稜郭跡（五稜郭公園）などの景色を写真に収めたり、眺望を楽しんだりしていた。展望台から五稜郭跡に向かって合掌したり涙を流したりする観光客はほぼ皆無であった。これは展望台という施設の性格によると考えられるが、戊辰戦争という歴史的事実やその記憶が展望台の空間においてはさほどダークな要素にはなっていない事を意味するといえよう。また、4コマ漫画や模型が観光客に過酷な戦闘シーンと兵士たちの死を想起させとは考えにくい。こうした展示物が五稜郭タワーの展望台を戊辰戦争で犠牲になった兵士たちの死のリアリティから観光客を遠ざける空間に保っていると考えられる。

こうした傾向は土方歳三をめぐる展示についても同様に見られる。展望台の窓際には土方のブロンズ像が置かれており、像の前や横で記念撮影をする観光客が複数確認されたが、像の前で祈ったり合掌したりする人々はほぼ皆無であった。また、五稜郭タワーの1階の展示コーナーには図8のような土方に関する説明パネルが設置されている。そこには土方の新選組時代の活躍から鳥羽伏見の戦いを経て五稜郭での戦死に至るまでの概略が説明されており、土方という一人の人間の死がリアリティをもって伝わるというよりは、過去の客観的事実ないしは情報を伝える要素の方がより強いと考えられる。

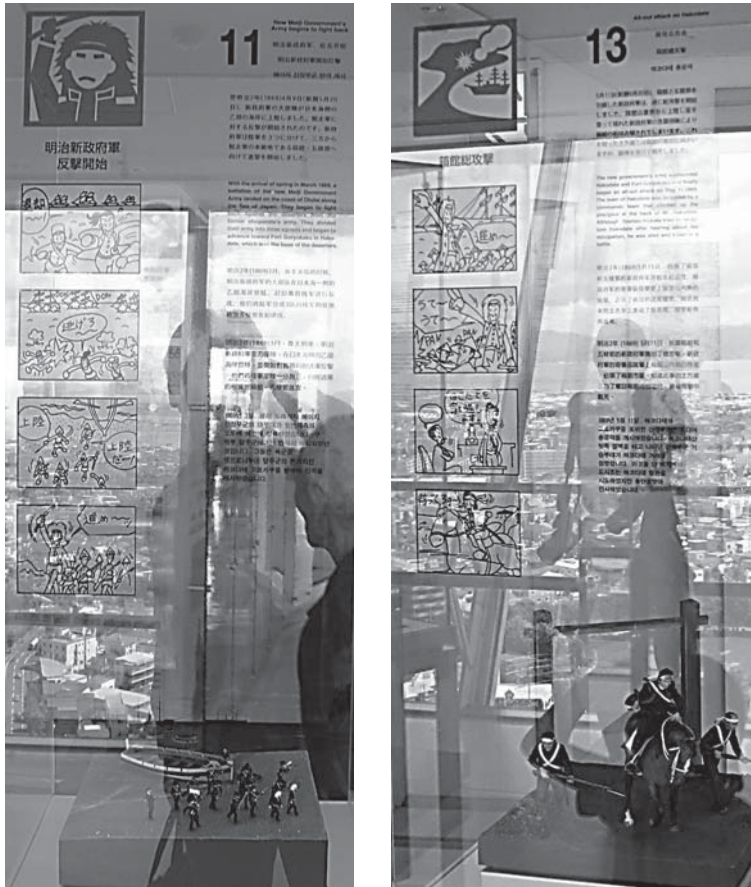


図7 五稜郭タワー展望台に設置されている戊辰戦争の説明パネル(部分)
出典: 2013年8月筆者撮影

このように、戦跡をめぐるツーリズムであるからといって必ずしもダークになるわけではない。それは時間の経過が確かに大きな要因となっていると考えられるが、戊辰戦争の終結をもって本格的な北海道の開拓を含む日本の近代化が始まったという歴史的事実を鑑みると、戦死者のリアリティよりもその後の発展の歴史を積極的に前面に押し出す事の方がツーリズムの展開

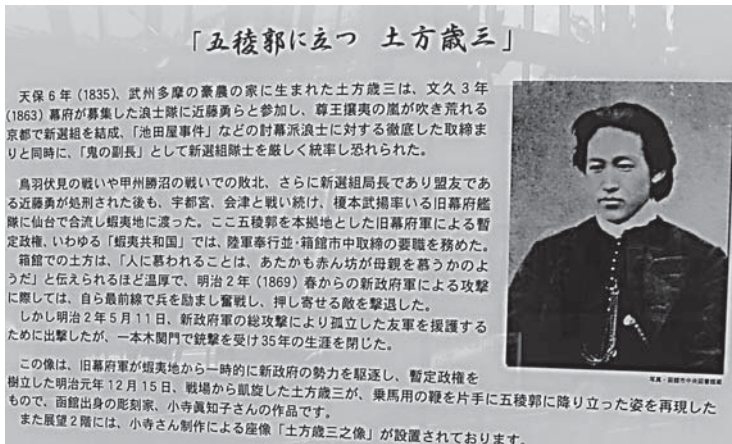


図8 五稜郭タワーの1階ロビーの土方歳三の説明パネル(部分)

出典：2013年8月筆者撮影

においてメリットが多いと判断されているのかもしれない。

それでは、戦争と並ぶ地域社会への大規模なインパクトである災害とツーリズムとの関わりを次節で考えてみたい。

3-2. 函館のツーリズムと函館大火

本節では、現在の函館市の一般的な観光にどの程度ダークな要素が見られるのかについて、特に近代以降の函館市でたびたび発生していた大火に着目しながら検討していく。その際、函館市内に設置されている観光案内の掲示板や看板のほか、JR 函館駅構内や函館市役所等で配布されている観光パンフレットを参照する。

はじめに図9は函館空港に設置されている観光案内板である。案内板には「西洋と東洋の文化が調和した、異国情緒あふれるまち。豊かな自然が織りなす四季折々の景観、港街ならではの新鮮な食も魅力です」とある。すなわち、幕末から近代にかけての函館という都市の歴史を通して歴史的なロマン、あるいはモダンな要素を前面に押し出していることが分かる。ここには

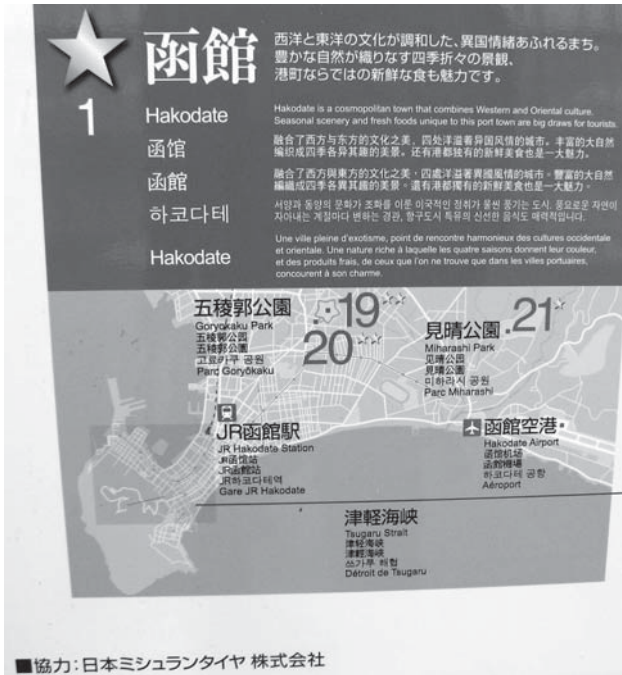


図9 函館空港に設置されている観光案内板(部分)
出典: 2013年8月筆者撮影

前節でも触れた戊辰戦争と同様に、函館大火による人(々)の死を直接的に想起させるような情報は提示されておらず、函館市の空の玄関口付近に設置されている観光案内板からはダークな要素が想起されることがほとんど無いということになる。

つづいて、函館駅構内の観光案内コーナーにて配布されている観光パンフレットについて検討すると、たとえば図10は現在の函館市内の主要な観光エリアとして元町、ベイエリア、五稜郭、湯川温泉を紹介している。このうち五稜郭付近のエリアについて、パンフレットでは「タワーから見下ろす、桜の星と光の星」との見出しでタワーから見られる春の桜や冬のイルミネー



図 10 函館駅で配布されている観光パンフレット (部分)

シヨンの美しさを宣伝している。五稜郭は前節で述べたように戊辰戦争の戦跡であり、歴史的事実として多くの兵士が亡くなっているものの、彼らの悲愴な死のリアリティがこのパンフレットを通して想起されたり、慰霊の場所として認識されたりすることはほぼ皆無である⁹⁾。

また、明治以降たびたび大火に見舞われてきた元町付近やベイエリアについても、赤レンガ倉庫をはじめとする近代建築が立ち並ぶ異国情緒とモダンな雰囲気や前面に押し出した表現がなされているものの、大火に関する情報は皆無である。そして湯川については、そもそも近代最後の大火が発生した1934(昭和9年)の後に函館市と合併しており、大火による直接的な被災範囲外であること、明治期から温泉街として発展していることなどから、そもそも大火の歴史的事実あるいは記憶が紹介文の中に登場していない。そのため、パンフレット中にも湯川に関してダークな要素は見出されない。

他方、図 11 は先述の図 10 で示された各エリアをより細分化して詳細に説明したパンフレットで、観光客がそれぞれのエリア内に存在する様々な観光スポットを徒歩で移動するための「まちあるきマップ」である。作成および

函館 6 まちあるきマップ
 歴史
 幕末の志士達が駆け抜けた箱館
 ~新撰組の足跡を辿る~
 70分 2.3km 210kcal
 坂之口史跡(箱館市坂之口町2-1)
 中野市街
 箱館市街
 函館港立工業記念碑
 土方歳三の銅像群(箱館市内)
 壱心斎の碑(箱館市内)

函館 20 まちあるきマップ
 特別編
 美しき折りの山「恵山」
 ~大地のエネルギーに触れる~
 60分 2.9Km
 人口神社
 十一宮跡
 恵山(恵山公園内)
 恵山公園入口
 恵山公園

函館 2 まちあるきマップ
 まち
 てくてく坂道 大三坂・八幡坂編
 ~坂が織りなす異文化のタペストリー~
 60分 1.3km 180kcal
 フォニクアキル
 坂道(北馬場第一歩の地蔵)
 大三坂
 坂本屋敷(箱館市街) 旧カール・レイモン邸
 坂道第一歩の地蔵
 教会群
 八幡堂

函館 知ってる? 知ってる?
 函館の坂~二十間坂~
 観光客で賑わう、函館を代表する坂のひとつ。明治12(1879)年の大火後、防火線として道幅を約二十間(約36メートル)に広げたことからこの名が付けました。かつては木立が住んでいたことから「緑坂」とも呼ばれていて、大工が多く住んでいたことから「大工町坂」とも呼ばれていたそうです。ちなみに、函館山要塞に備え付けられた28cm榴弾砲(全長約3m、重さ約28tというとても大きな大砲)は、函館山の千畳敷砲台に6門備え付けられていたのですが、この坂を通過して引き上げられたとも云われています。

函館 知ってる? 知ってる?
 レンガのイギリス積み・フランス積み
 産する大火による教訓から、函館では耐火性に優れたレンガが使われるようになりました。特に物品をしまひ込む倉庫にレンガ造りが多いのはこのためです。このレンガの積み方には「フランス積み」と「イギリス積み」があります。フランス積みは、レンガの小口と長手を1個ずつ交互に積み重ねる積み方で、イギリス積みはレンガを小口だけの段、長手だけの段と1段おきに並べる積み方です。元町公園内旧開拓史書庫は、奥の方がフランス積み、後年増築された手前部分はイギリス積みで造られています。

函館市電話案内
 案内の一文字案内は分間制で更新しています。
 7分 5~6分 10~17分 15~16分
 市電1日乗車券販売中! 大人600円・小人300円
 お支払は案内のQRコード、お支払などどうぞ!
 函館市交通課 | 函館市駅前1階1号 TEL.0136-32-1726
 http://www.city.hakodate.hokkaido.jp/transport/

函館市電話案内
 案内の一文字案内は分間制で更新しています。
 7分 5~6分 10~17分 15~16分
 市電1日乗車券販売中! 大人600円・小人300円
 お支払は案内のQRコード、お支払などどうぞ!
 函館市交通課 | 函館市駅前1階1号 TEL.0136-32-1726
 http://www.city.hakodate.hokkaido.jp/transport/

図 11 函館駅で配布されているまちあるきマップ

発行は函館市観光コンベンション部観光振興課であり、2013年8月時点で20種類以上がJR函館駅構内のほか、函館市役所内でも配布されている。

これらのパンフレットのうち、元町付近の二十件坂や元町カトリック教会、ベイエリアの赤レンガ倉庫群を紹介したものについて、明治から大正にかけての大火の記述を見ることが出来る。たとえば図11の左下の二十件坂の説明文には「明治12（1879）年の大火後、防火線として道幅を約二十間（約36メートル）に広げたことからこの名が付きましました」とあり、度重なる大火の結果、防火帯として拡幅された道路であることが示されている。また、同図右下の赤レンガ倉庫群についても「度重なる大火による教訓から、函館では耐火性に優れたレンガが使われるようになりました。特に物品をしまい込む倉庫にレンガ造りが多いのはこのためです。」と述べられている。これらの文章からは「近代以降の函館を襲った大火がこうした道路や建築物を生み出すとともに、近代の函館の都市形成の契機となった」というニュアンスが読み取れる。そして、これらの文章から大火の犠牲者の死のリアリティを実感するには、余程の想像力を働かせない限り困難であろう。さらに、元町エリアに設置されている観光案内板や先述の「まちあるきマップ」には旧函館区公会堂やカトリック教会、ハリストス教会のほか、日本で最初の鉄筋コンクリート寺院である真宗大谷派函館別院といった宗教建築が近代期の度重なる大火による焼失を乗り越えて再建されてきた歴史的事実が紹介されている。

このように、観光客が現地を徒歩で移動できる観光スポットの案内パンフレットからは人（々）の死などのダークな要素はほとんど見いだされない。むしろ、人（々）の死という事実がそこから取り除かれ、大火が函館という歴史的で異国情緒ある都市を形作った、という図式で説明されていることがわかる。すなわち、一般的な観光において、大火という歴史的事実は観光客に悲劇を想起させることはなく、むしろ眼前に広がる「明るい」観光地の形成に一役買ってくれているかのような印象を抱かせているといえよう。ま

た、現在の函館市における一般的な観光の中ではたとえダークな要素を持った情報が提示されていたとしても、そこからダークツーリズムに結びつくことはなく、むしろ「明るい」ツーリズムを補強するという逆説的な現象を垣間見ることができるのではないだろうか。それはこのまちあるきマップの中にある「なにげなくそこに佇む西部地区の坂道は、度重なる大火に遭遇しながら、そのたびに復興し進化してきた函館の街の証の一つともいえます」という説明文からも窺い知る事ができるだろう。

4. ダークツーリズムとしての函館大火慰霊祭

前章では現在の函館市のツーリズムの中に近代以降の大火の情報がどの程度含まれているか、それがツーリズムの表象や状況にどの程度影響しているのかを見てきた。前述したように一般のツーリズムにおいて、幅の広い道路や赤レンガ倉庫などが形成された背景や、カトリック教会の焼失と再建、およびコンクリート造りの真宗寺院の建立といった説明文の中に大火の「事実」を見出すことはできる。ただし、そこから人々の死や悲惨な被災状況などが想起されるような記述や表現は見られない。あくまでも、「明るい」、「異国情緒あふれる」、「近代建築の」函館像を説明するための「事実」であり、わざわざ「人（々）の死」のようなダークな要素が無くとも成立するのであろう。「人（々）の死」の過度な実感は、むしろポジティブでモダンな函館像にとってかえってマイナスに作用するのかもしれない。

こうした「明るい」ツーリズムが函館市の主要なものである一方で、ダークなツーリズムとして函館大火慰霊祭（以下、慰霊祭とする）が挙げられよう。昭和9年の大火の犠牲者の慰霊祭は大火発生から約80年経った現在でも大火が発生した3月21日に毎年開催されている。消防団、仏教会、函館共愛会の代表といった地元の関係者を除いた参列者は2004年から10年余りで毎年60名前後となっている。函館市が長年主催してきたこの慰霊祭の参

列者に関する資料は2004年から2011年までのものしか存在していない¹⁰⁾ため、データの不足はやむを得ないが、それでもこの8カ年の傾向に関してある程度の考察は不可能ではない。

函館市保健福祉部提供の資料によると、2004～2011年までの8カ年の慰霊祭参列者の合計はのべ人数495名、実数169名となっており、平均すると毎年60名ほどの参加者が見られる。また、図12はこの8カ年の大火の慰霊祭への参列者の推移を示したものであるが、年によって70名を超えることもあれば50名を下回ることもある。ただし、参加人数全体が減少しているというわけでもない。そして、図13は8カ年のうちの参加頻度を示したグラフである。このグラフからは8カ年のうち1～2回の参列者が大半を占める一方で、5回以上の参列者も40名ほどで、ここ8カ年全体の参加者の2割強となっている。この5回以上の参列者の延べ人数は260名ほどで、8カ年の延べ人数全体の過半数を占めている。

また、図14からは、現在も大火発生時の函館市のエリア内に居住する参加者が全体の半数を占めているほか、北海道内からの参加者と合わせるとそ

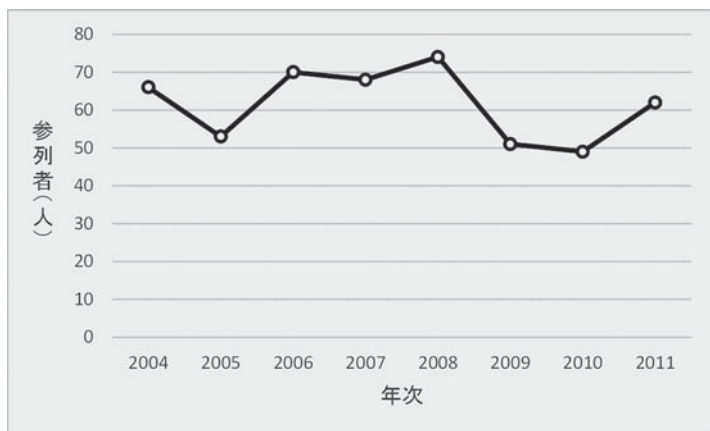


図12 函館大火慰霊祭への参加者数の推移
出典：函館市保健福祉部提供の資料をもとに筆者作成

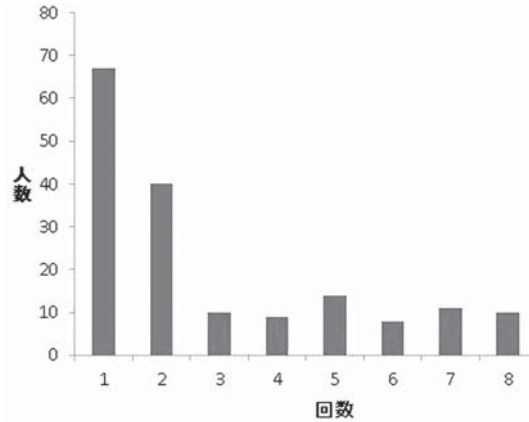


図 13 2004～2011年までの函館大火慰霊祭参加者の参加頻度
出典：函館市保健福祉部提供の資料をもとに筆者作成

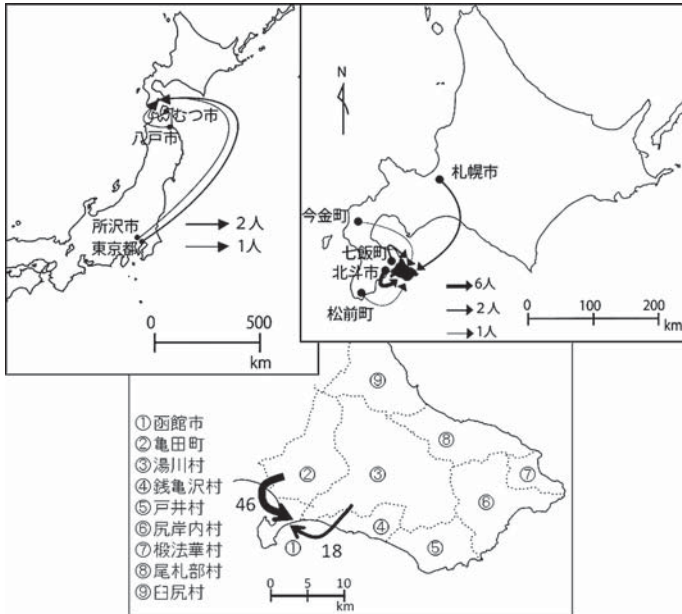


図 14 2004～2011年までの函館大火慰霊祭参加者の移動
出典：函館市保健福祉部提供の資料をもとに筆者作成

の大半を占めていることが分かる。その一方で他の都県からの参列者も数名見られる。参列者に聞き取りを行ったわけではないので、あくまで類推であるが、函館市内からの参加者の中には遺族ではないが供養や過去の災害への関心から参列する人々も少なからず含まれると考えられる。それに対して道外からの5名の参加者は遺族の可能性が高い。3月下旬の、まだ寒冷な時期の函館¹¹⁾で開催される合計20分足らずの行事のために時間と費用をかけて来訪する強い動機として、過去の災害や防災への一般的な関心や、自身と血縁関係の無い犠牲者への想いを馳せる、といった事は考えにくいのではないだろうか。むしろ、遺族すなわち大切な身内の慰霊であればこそ、時間と費用をかけてでも参加すると推測できよう。

ただ、いずれにせよ参列者にとって年1回の20分足らずのこの慰霊祭は、大火という過去の災害によって犠牲となった人々の死を強く想起させるものであり、そこから慰霊祭への参加は巡礼の旅とも重なる部分が少なからずあると考えられよう。また、慰霊祭の会場となっている慰霊堂(図15)は、先述のように大火の際に最大の犠牲者を出した場所に存在し、現在も600人以上の遺骨が安置され、供養のために仏像が安置されているほか、毎月21日には月命日の法要が函館仏教会加盟の各寺院の当番制で営まれている。慰霊堂は遺族や一部の市民にとっては大火の記憶のみならず犠牲者の死を想起させる、ある種の聖地となっているのではないだろうか。

すなわち、大火の慰霊祭や参列者の行動の中にはダークツーリズム的な要素が現在の函館市の一般的なツーリズムと比較して相対的に強く見出されると指摘することは十分可能であろうし、もしかしたら慰霊祭とそこへの参加がダークツーリズムそのものであるのかもしれない。ただし、この慰霊祭や慰霊堂の存在に関しては前述のように一般のツーリズムにおいて「事実」としてもほとんど登場することはなく、函館市における主要なツーリズムが部分的にせよダークになる兆しは現在のところほぼ見受けられない。

なお、この慰霊堂自体は建立から80年近くが経過し、老朽化が進行して



図15 函館大火慰霊堂（上：正面 下：内部）

出典：2013年8月筆者撮影

いる。もともと函館市が建設・維持管理してきた施設であるが、市の財政難や大火後80年ほどが経過したことにより、市としては建て直すかどうか未定とのことである¹²⁾。おそらくは取り壊した場合に建て直されない可能性も考えられる。また、慰霊堂は日常的に函館市の嘱託職員が管理している。筆者は2013年3月に2名の嘱託職員に聞き取りを行ったが、彼らは慰霊堂の

存続を希望している。さらに、彼らは慰霊堂に対して大火の歴史や集合的記憶とともに防災教育を担う重要な施設として市民が共有し伝承するべきものと認識している¹³⁾。この慰霊堂が今後の函館市においてダークツーリズム的な要素として重視されるのか、もしくは時間の経過とともにダークな要素が薄まっていき、やがて行政上の事情で消滅するのか、といった点も看過し得ない研究課題であるが、この議論は別稿に譲ることとする。

5. おわりに

本稿では北海道函館市を事例に、過去の災害が現在の観光に与えた影響とその痕跡がどのような形で残っているのかについて検討を試みてきた。現在の函館におけるツーリズムを構成する大半の要素は「明るく、異国情緒あふれる近代建築に囲まれた、夜景が美しい都市」の魅力を伝えるものとなっている。もちろん、そこには戊辰戦争での戦死者の情報や、明治以降の大火に関する事実記載は見られるものの、そこからダークな情報は除外されている。もしくは、あえてダークな要素を語っていないということもできよう。さらに、観光客が近代期の戦争や大火などの情報から人々の死を直ちにイメージすることが困難であり、わざわざイメージするまでもない、ということなのかもしれない。これは100年ほどの時間が経過したために過去の人々の死を想起することが困難であるとも捉えられるが、五稜郭跡での土方歳三の戦死情報を通して特定の個人の死と悲劇のヒーローの最期を想起させるのであり、時間の経過によって人（々）の死のリアリティが喪失するわけではないとも考えられる。ただし、土方歳三の死を想起することは必ずしもダークツーリズムと呼べないのかもしれない。観光客の大半はおそらく土方を悲劇の主人公と捉えると同時に、たとえばアイドルのような憧れの人物への憧憬を抱くことはあっても、そこから彼の死を悼んで嘆き悲しみ、供養しようとする観光客はほとんど見られないからである。くわえて、旧幕府軍、

新政府軍を問わず土方以外の戦死者に対する追悼の念を抱き、彼らの死が想起させることもほとんどないであろう。したがって、ダークツーリズムを定義するとき、単に人の死を想起させるだけではなく、どのような感情を抱かせるかが重要な要素となるのかもしれない。

他方で、函館大火の慰霊祭はダークツーリズムのようなもの、というよりもダークツーリズムそのものと言えるのかもしれない。参加者の大半が函館市内の居住者であるため、一般のツーリズムのような函館市外—大半は北海道外であろうが—からの観光客とは性格が大きく異なるが、それでも年1回の非日常的な時間と空間を経験する人々が毎年60名ほど存在するのであり、彼らにとっての慰霊祭への参加は巡礼の旅とも重なる部分が大きいと考えられる。すなわち、慰霊祭とは参列者にとっては昭和戦前期に大火によって非業の死を遂げた数世代前の人々の魂を鎮める行事であり、慰霊堂は犠牲者を供養し、彼らの死を想起させる空間なのである。その死の連想も単なる歴史的事実にとどまらず、業火を逃れ川沿いにひしめきあった犠牲者の地獄の如き苦しみや断末魔の叫びの末の死なのであり、リアリティをもって追体験されることになるのであろう。

こうした函館大火慰霊祭という名のダークツーリズムと、現代函館の一般のツーリズムとの間に何らかの関連性を見出すのは、データの不足もあって現時点では余りにも大きく困難な作業である。今のところ一見すると全く異質なように見受けられるこれら二つのツーリズムがいずれどこかで思わぬ形で交差するとき、函館市という近代以降に大火や戦争等による数多くの人々の死の上に形成されてきた都市のエスノグラフィーに新たな1ページが書き加えられることになるのかもしれない。

注

- 1) 筆者が参加したツーリズム研究ワークショップ「ダークツーリズムという問い」(於立命館大学、2014年11月16日開催)においても、ダークツーリズムという用語をめぐる定義や概念について活発な議論が行われた。

- 2) たとえば、1934（昭和9年）にトラピスト修道院（現北斗市に立地）の関係者が函館市街地を絵葉書にするために写真撮影したところ、憲兵から取り調べを受けた。この時、新聞紙上にはトラピスト修道院の関係者に対するスパイ疑惑の記事が掲載された。函館山の写真撮影に関するこうしたトラブルはこの他にもたびたび発生していたという（『函館市史 通説編第3巻』）。
- 3) 『函館市史 通説編第3巻』によると、湯川町は江戸時代から温泉が湧出しており、明治期以降には幹線道路や鉄道の建設によって温泉街として発展し、人口が増加した。その一方で町単独での飲料水の確保が困難であったことと、1934（昭和9）年の函館大火を契機とする函館市からの移住者の増加などにより、函館市との合併が数年の検討の末に実現したという。
- 4) 函館山の麓には目立った河川がないため、井戸水を利用せざるを得なかったが、井戸を掘る経済力がない場合は水を日常的に購入していたという。
- 5) 現在の二十間坂通りがその代表例である。
- 6) 共愛会の初代理事長が当時の函館市長であったことから、発足当時の共愛会が函館市と強い関係を持っていたことが分かる。
- 7) 2013年8月に実施した函館共愛会関係者への聞き取りによる。
- 8) 大火の際、迫り来る火を逃れようとして多くの人々が慰霊堂付近の亀田川に飛び込んで凍死し、あるいは飛び込む時に将棋倒しになって圧死した。現在でも大火の犠牲者のうち600人分の遺骨が慰霊堂の奥に安置されている。なお、函館共愛会提供の資料によると、慰霊堂は大火復興の義捐金のほかに、函館市からの資金を元に建設された。現在、建物は函館市が所有している。
- 9) パンフレットの文中では「戊辰戦争の最後の舞台となった五稜郭」と記されているものの、慰霊や悲愴が感じられるような文脈ではなく、タワーからの眺望の素晴らしさがその後の文章で述べられている。
- 10) データ提供を受けた函館市保健福祉部によると、2004年以前の参列者一覧のデータは処分されており、現存していないという。そのため、慰霊祭の時系列的な分析がきわめて困難である。
- 11) 慰霊堂は約600㎡の鉄筋コンクリート造りであるため、3月下旬の建物内は相当に冷え込むという。
- 12) 2013年3月に実施した函館市保健福祉部職員への聞き取りによると、慰霊祭の関連予算はもともと年数万円程度であったが、市の財政状況が厳しいために減少しており、たとえば慰霊祭の供花の値段を年々少しずつ下げているという。
- 13) 慰霊堂は日常的に函館市民のスポーツ施設として無料開放されており、バドミントンや卓球などが行われている。また、希望すれば慰霊堂で参拝することも可能である。2013年3月に50代の嘱託職員に聞き取りをした際には「自分が子どもの頃は『慰霊堂に行く』と言っていたが、『なぜ慰霊堂という名前なのか』と子どもながらに疑問を

もち、親から函館大火の話を聞き、自然と大火について知っていった。現在は市民や市役所職員の大火とその歴史に対する意識が低く、慰霊堂に来て大火の事を知る機会が生かされないのは残念」との意見が聞かれた。

参考文献

- 雨森直也 (2013) 「ダークツーリズムに垣間見える「紅いイデオロギー」—2008年汶川大地震の事例—」『立命館大学人文科学研究所紀要』No.102 : 69-91 頁。
- 厚生部社会課社会係寄贈 (1982) 『函館大火慰霊堂概要』。
- 菅初次編集・発行 (1934) 『函館大火災復興写真帳』。
- 高木一雄 (1985) 『大正・昭和カトリック教会史 2』 聖母の騎士社。
- 野村琢民編 (1941) 『函館市誌』 北海道社会事業協会。
- 函館消防本部編 (1937) 『函館大火史』 函館消防本部。
- 函館市総務部市民課編集・発行 (1961) 『函館 1961年版』。
- 函館市史編さん室編 (1995) 『函館市史 都市・住文化編』 函館市。
- 函館市史編さん室編 (1997) 『函館市史 通説編 第3巻』 函館市。
- 函館市史編さん室編 (2002) 『函館市史 通説編 第4巻』 函館市。
- Phillip R, Stone (2006) 'A dark tourism spectrum : Towards a typology of death and macabre related tourist sites, attractions and exhibitions', *Tourism: An Interdisciplinary International Journal*54 (2):pp.145-160.

参考資料

(観光パンフレット)

株式会社ぎょうせい『浪漫函館インフォメーション』。

函館市観光コンベンション部観光振興課 (2012) 『函館まちあるきマップ』。

函館市ホームページ : 「来函観光入込客数推計」

<http://www.city.hakodate.hokkaido.jp/docs/2014021800059/> (2014年5月21日および2015年1月18日閲覧)

函館市ホームページ : 「函館市の人口」

<http://www.city.hakodate.hokkaido.jp/docs/2014030300373/> (2014年5月21日および2015年1月18日閲覧)